

秋

に、民衆は依然として、仏教の信仰生活を営んでおりました。私は生まれながらにして、仏教信仰の生せる時代でありました。しかしながら、幸いに私の誕生地が日本の西端、しかも山間僻地であつたが故であります私は、明治維新革命の一八年後に生まれましたから、仏教排斥の風潮が、ようやく民間にも定着する所となりました。

その頂点が、共産主義国家の建設であります。

日本国も明治維新的革命に、国家の宗教たりし仏教を排斥しましたが、これに代わるに「神道」を宗教として、政治と神道とを一体化し、いわゆる祭政一致の標語を作りました。祭政一致なるが故に、政治の中心が、また祭祀の則ぢ宗教の本尊ともならねばなりません。日本の天皇の神格化が、祭政一致の爆発点となりました。

した。[近代國家]とは、欧洲に起つた科学文明を目標として、宗教文明に反抗する国策であります。しかるに、今よりおよそ一〇〇年前、「明治維新」と称する近代国家建設の政治革命が行なわれました。この頃が、共産主義国家の建設であります。

は起りませんでした。日本民族性と仏教とは、あたかも一体にして分かつべからざるが如くであります〇年、乃至一四〇〇年の間政治体裁は、しばしば変遷しましたが、いまだかつて、一度も仏教排斥事件を起さる条件であることを示されました。それ以来、日本国は朝野貴賤ひとしく皆仏教徒となつて、一三〇〇年、乃至一四〇〇年の間政治体裁は、しばしば変遷しましたが、いまだかつて、一度も仏教排斥事件を起しました。

か、はたまた信ずへからざるかといふことで、暫時検討されました。やがて、聖徳太子が出世しました。日本国には、開闢以来「神道」と称する民族宗教が信仰されておりました。それで仏教を信ずべき日本国は、イノンドの佛教が中國・朝鮮を経て伝来しました。それはおよそ一四〇〇年以前であります。規模を有する大噴火口趾の盆地「坂梨」という人口稀薄の山間僻地に生まれました。

私の誕生地は、日本列島の中にも西端に位置する九州、九州の中心地「阿蘇山」と称する世界第一の

ゾドの外に私の生涯はなかつたようあります。

私は今年九四歳になりました。この長き一生涯におけるイノンドの國との關係を振り返って見れば、イ

日本じにて、イノンド民主共和国からネル一国際理解賞受賞の恩恵を被りました、深く感謝致します。

### 南無妙法蓮華經

達 井 日 藤

昭和五十四年一月十九日

### ネル一国際理解賞受賞感謝の辭

無畏の印綬

其

と想つて、靈鷲山を拝みましゆうと念願致しました。かくの如き念願は、私一人の念願には止まりませ  
佛様は見えなくとも、佛様の常に在します靈鷲山は今も昔のままであります。佛様が常にいに在す  
と説かれています。

「我常に此に住才れども、諸の神通力を以て、頗爾の衆生をして、近じと雖も而も見ざらしむ」

法華経に

現代惡世の苦難を救う宗教を説き残されしお山であります。

王舍城者闍崛山こそは、人類最高の宗教が演説されたお山、釈尊出世の本懐を宣へられたお山、我等  
りき」云々

妙法蓮華經序品第一

出家して御経を誦み始めました。

私は一七歳にして、中等教育を終わる時、自ら発心して出家しました。則ち仏弟子となつて、一般の  
社会から離れた特殊の生活に入りました。仏弟子となつたといふことは、一五〇〇年の時間を隔て、万  
里の波濤を隔てたるインドの仏教の開祖釈迦牟尼世尊のお弟子として、この人生を幕らすことであ  
ります。私は、身は日本國に生まれましたけれども、心はインドの國に生まれたわけであります。

まるぬ處に和平の生活はありません。そこで人生は、先ず宗教の信仰を求めねばならぬことになります。  
宗教は善悪を判然せしめ、悪を止め、善を育てます。宗教なき處には善悪は定めませぬ。善悪の定  
めあります。

中学校教育を受けた頃になつて、ようやく人生問題に目があきました。政治家となつて善政をへべき  
か、將軍となつて勝利を得へべきか。いすれも華々しくいじつてあります。これに反して、宗教は永遠に亡びないものを求めて  
あります。その影響も限られた狭い範囲にとどまります。これに反して、宗教は永遠に生きるものでありますから、十方世界に弘めます。宗教は一人の独占するものではなく、万人の共存するもので  
ありますから、十方世界に弘めます。宗教はまた、十方世界に通ずる道を求めてきたもので  
あります。その影響も限られた狭い範囲にとどまります。

私の少年期には、運動競技などは殆どありません。田舎のじとて、年中何の娛樂もありませぬ。農  
作業のお手伝いをすることが少年の日にも仲々忙しかつたようですが、娛樂はお寺詣りや神社の祭  
礼に詣る程度であります。毎日、朝日とともに起き、毎夜、夕陽とともに眠る、全く自然とともに生  
活しました。田舎の貧乏の生活は、誘惑なき人生の幸福の生活であります。

活に入ることができました。私と印度との関係は、私の誕生以前先祖代々にさかのぼらねばなりません

#33

インドの天地は如来常住の仏蹟であります。インドの人たちは、如來の不殺生戒を信じて、それを心にします。

「神の審判は近づけり」  
私もガンディー翁の、陸行進の写真や糸紡ぎの写真を見て驚きました。」さても奇妙なことが起つたと叫びました。ガンディー翁一人、毎日深く夢路をたどっておりました。

「神の審判は近づけり」  
ました。その中でガンディー翁は、

ガンディー翁とその一門は、糸を紡いだ。塩を作ったという罪をもつて牢獄に幽囚されるに至りました。

しておきました。

うち、だれ一人も想像する者もなかつたでしょう。これはガンディー翁一人の白昼夢に過ぎないと評価され、旧政権に代つて新政権ができると、人間の革命歴史上、先例もないことありますから、世界の

ということがあります。いかに木綿糸ができるても、いかに塩を作つても、それで国家の政治革命が行われます、原始的な手法をもつて、木綿糸を紡ぐといふことがあります。自ら海の潮水を沸かして、塩を作ることを許します。しかるにインド革命運動は、全然軍事力を採用せずして、自ら機械に頼ら一等、いずれも旧政権を打倒し、新政権を樹立するといふことがあります。そのためには、暴力を当時、世界各国に政治革命が行わつたありました。スピート連邦のレーニン、イタリイのムッソリ尼が出現して、コングレスの運動を指導するになりました。

第に生長して、そのコングレスの活動に注意するようになりました。最後、マハトマ・ガンディー翁

コングレスの結成の年に、私は日本に誕生致しました。コングレスの運動が、拡大するにつれて私も次に印度には「コングレス」と称する政治団体が結成され、独立自治の政治革命を計画しました。コ

果報を想い続けて、日夜悦びにたえませぬ。

半生、実に五十年間は、インドの国を中心として奔走することができました。仏弟子となつた私の身のドのために揺がれて働きたいと誓いを發しました。このお仕事を自ら「西天開教」と呼びました。私の後には五〇年以前、日本をたつてインドに渡りました。再び日本に帰らない覚悟を決して、余生を印度であります。

日本人全部の念願でもあります。仏教によつて結ばる日本とインドとは、かくも近へ親しいもの

32

の宝塔建立、カリンガの宝塔建立の如きは、この委員会のなせるところの仏教復興の一端であります。が指命されました。私は外国籍ではありますが、仏弟子として唯一一人の委員に加わりました。王舍城仏教復興の第一着手として王舍城復興委員会が結成され、ネル・首相が自ら委員長となり五人の委員が決定して、平和国家の建設とし、平和国家建設のために平和の宗教「仏教」復興に儘力すべく題を決議イントは独立直後、サンチーのお仏舍利塔の許に指導者が集合して、イント民主共和国の根本政策を表を送らず、スリーランカは独立して仏陀の教訓を演説して、日本に寛大の処置を要求しました。代表はいざれも日本軍の侵略戦争の罪を糾弾せざる者はありません。の中、イントはこの会議に代表昭和二十六年（一九五一年）九月九日、対日講和条約が調印されました。講和会議の席上、連合軍側の死刑に処しました。このときもイント側の判事ペール氏は日本無罪論を主張しました。昭和二十一年（一九四六年）五月、連合軍は東京に極東軍事裁判を開き、日本の最高の七人の指導者人々を慰めました。特に細心の心遣いをもって、少年のために一頭の象を奇贈されました。ジャワ一ハルラール・ネル・氏はイント民主共和国の初代首相となり、日本を訪問して敗戦国日本のイントは昭和二十二年（一九四七年）八月十五日、非暴力革命に成功して独立自治を獲得しました。ここに終結しました。

たが、何の効もなく昭和二〇年（一九四五）八月一五日連合軍に日本国は降伏して第二次世界大戦は日本国に帰つて、あるいは陸海軍の指導者に会い、あるいは戦線を駆け巡つて和平的終戦を祈りました。不幸にして私は英語もイント語も話すことができません。そこで私の意見を英訳して、ガンディー翁には次第に拡大するのみならず、日本、イタリアは三国防共協定を結び、次第に世界第二次大戦へ発展していきます。その火元はわが日本国であります。日本國の運命はどうなるにとどりましまさざれども世界の状勢は、はなはだ危険の様相を呈してきました。日本と中国との戦争が起つて戦火が本國に帰りました。私はイントの独立よりも先ず、日本國の亡國を救わねばならぬと思って、一人、イントを去つて日本に帰つて、あるいは陸海軍の指導者に会い、あるいは戦線を駆け巡つて和平的終戦を祈りました。

一九三三年（一九三四年）一〇月四日、ワルダのアッシュラムにおいてガンディー翁に初めて会見することができました。会見時間わずかに一五分間で何を語る時間もあります。翌日と連続して会見しましたが、イントに渡つて約三ヶ月を経過しました。一人の信者もできませぬ。またガンディー翁に会ううとも用いて政治革命を行われておられます。仏弟子として私の信仰活動の舞台は、正にイントに開かれました。

佛教復興はただインドの平和國家建設に必要な精神的運動には止まりませぬ。今日、途方に暮れた世界平和建設のために最も必要な精神的運動であります。

インドの非暴力革命はひとりインドの政治的名譽たるのみにはとどまりませぬ。世界万国の今後の政治的方針を指導する羅針盤であります。

インドの國の佛教復興全世界の佛教弘通は、現代すでにこの娑婆世界の人類全滅を幾回も繰り返してなお余りある殺人破壊兵器の脅威にさらされる我等一切衆生に無畏の印綬を施す所以であります。畏るるな、「諸仏救世者は大神通に住して、衆生を悦ばしめんが為の故に無量の神力を現し給ふ」

この世を亡ぼす力もある、これを機械力という。この世を救う者の力もある、これを「大神通力」という。機械力は所詮物質力に過ぎぬ。大神通力は精神力である。いかなる時代の文明でも、もし物質力が精神力に勝てば、その文明は亡びる。もし現代において、人類が自ら滅亡を避けんと欲するならば、物質力に勝る精神力を發揮せねばならぬ。精神力の發揮、これを開仏知見と説く。諸仏世尊は苦惱の海に沈める衆生をして仏知見を開かしめんがために世に出現し給う、これを「一大事因縁」と名づくと説かれました。精神力が物質力に勝つた現証は、則ちインド民主共和国の独立自治の獲得であります。世界人類が平和と安穏とを求めて、その精神力を發揮するならば核兵器、トライデントミサイル、宇宙兵器も何の役目も果たすことはできないでしよう。

不殺生戒は、一代教主釈迦牟尼世尊制定の嚴戒であり、天地生々發育の自然の理法であります。いかなる大魔魔王もこれを破ることはできませぬ。畏るるな、無畏の印綬は、すでに我等が手に授けられました。

南無妙法蓮華經

## 同事・僧伽の和合

### 《和合に努めるように》

南無妙法蓮華經

昭和五十三年十一月二十七日 於 仏足山